



脈々と続くもの

北村 雅則

南山大学は2021年に創立75周年を迎え、今年(2022年)は76年目へと歩みを続けている。昨年は75周年を記念したさまざまな行事が催されたが、その最後(そういう位置づけではないかもしれないが)として、今年5月26日に「第1回 南山大学「人間の尊厳賞」表彰式・記念講演会」が開催された。「人間の尊厳賞」は75周年記念事業の一環として創設され、「自らの尊厳と他者の尊厳を認め、一人ひとりをかけがえのない存在として様々な活動に取り組む個人または団体・組織」を表彰するものである。第1回の受賞者として、中国天津で日本語教育に従事されている青木陽子さんが選ばれた。

受賞記念講演を通して、青木さんご自身が全盲であることを乗り越え、同じように視覚障がいを持つ中国の日本語学習者を長きに渡り支援していること、周囲の障がいに対する意識変化を促し、さらには日本との国際交流を推進させてきたことなどを知り、なるほど、これは確かに「人間の尊厳のために」行われてきた活動であり、受賞も当然のことだと合点が行った。

「Hominis Dignitati(人間の尊厳のために)」。このモットーが持つ意味は広く、深い。しかし、私自身、人間の尊厳とはこういうものだと言えるほど深い理解に至っているわけではない。人間の尊厳といえば一般に基本的人権と解される向きもあるが、それだけに留まらない何かがありそうではある。そこでヒントとなりそうなのが「自らの尊厳と他者の尊厳を認め」という点である。ルカによる福音書にある「善いサマリア人」に次のような一節がある。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい」。我流の解釈に過ぎないが、隣人を自分のように愛するためには、まず、確固たる自分自身が必要だ。学生たちに、人間の尊厳のために何ができるかを問うと、恵まれない人のために働くことという回答が返ってくることが多い。それはそれで正しい。しかし、社会が多様化・複雑化し、自分自身の立ち位置を見失いがちな現在において、極端な自己愛や自己の喪失に陥るのではなく、自己を保ったうえで他者のことを思う必要があるのではないか。青木さんが「人間の尊厳のために」行ってきた活動は、困難の中にあっても青木さん自身が確かに存在し、それが他者への愛という形で波及したものと考えられる。だからこそ、青木さんの活動に深い意義が見いだせるのだ。

「人間の尊厳」や「人間の尊厳のために」行う活動は、唯一無二の正解がある類いのものではない。一人ひとりの人間に個性があるように無限の形があってよい。南山学園創立者ヨゼフ・ライネルス神父は「一人ひとり、必ずひとつの尊い使命を与えられたかけがえのない存在である」という言葉を残している。学生たちが今は気づいていないとしても、自分がかけがえのない存在であること、一人ひとりに与えられた尊い使命があること、そして、それが南山大学を支える「人間の尊厳のために」につながっていることを伝えていかなければならない。それが南山大学に奉職する者の使命であるとも感じる。

奇しくも青木さんは南山大学の卒業生である。ここで学んだ人に受け継がれる教育の歴史・果実を目の当たりにし、「人間の尊厳のために」について考えを深める絶好の機会となった。私にとって南山大学の76年目はそういう年である。

(KITAMURA, Masanori : 国際教養学部准教授)

— 南山大学創立75周年記念 —
NANZAN ビブリオテカ ヒストリア その2

はじめに

本稿は前号の「NANZAN ビブリオテカ ヒストリア その1」に続くものである。

その1では、五軒家町の南山外国語専門学校の小さな図書室から始まり、山里町にアントニン・レーモンドの設計による新しい図書館が建てられた後までの約35年間の歴史を辿ってきた。その2では、図書館の地下2階に書庫が増設された1980年頃から現在に至るまでの約40年間の図書館の歴史について振り返ることになる。そのため、章立てを「5」から始めることをお許しいただきたい。

現在の地にキャンパスが移ってから、図書館では、本学の建学の理念である「キリスト教世界観に基づく学校教育を行い、人間の尊厳を尊重かつ推進する人材の育成」に係る様々な活動に本格的に取り組むことになる。その2では「建物」と「蔵書」の側面に加えて、「キリスト教」に係る諸活動についても触れてみたい。

5. 南山大学<山里町>：地上3階・地下2階(1980-2017)

■図書館の規模：地上3階地下2階（延べ8,430㎡）

収容可能冊数：約87万冊、閲覧席：712席

1970年代後半に蔵書が25万冊を超え、書架は満杯に近くなり、全面開架制を維持することが困難になる。図書館事務室に残された当時の記録によれば、「(1)新図書館の規模」「(2)増改築の位置」「(3)図書館事務室、学生用図書室、研究用図書室の規模、機能、運営」「(4)共同研究室、ゼミナール室、学生自習室の設置」「(5)人類学研究所陳列室の設置場所」「(6)学園中央図書館としての機能」「(7)図書館に追加すべき機能、施設、設備（マイクロリーダー関係、AV関係設備、コンピュータデータ回線、各種展示室の設置等）」等の諸事項についての検討を委嘱された図書館増改築計画準備委員会委員長伊藤孝一教授よりヨハネス・ヒルシュマイヤー（HIRSCHMEIER, Johannes, 1921-1983）学長宛に1978年11月7日付で答申が提出されたようである。答申によれば、収容可能冊数100万冊（運用可能冊数70万冊程度）、220名の教員と6,000名の学生、そして学園および大学の中央図書館としての保存機能を持つこと、キャンパス内での単一館として特殊資料群をその独自の機能をいかしたまま吸収し各学部の多様な要求を果しえるようにすることが基本条件に挙げられている。それを満たすために想定された図書館の広さは11,560㎡で、「30年後における学園中央図書館としての本学図書館の規模を想定し、基本条件を策定して、これを満たすために必要な図書館建築物の基準平米を算出したが、現段階においては諸般の事情を考慮して、新築計画を避け基準平米を出来るだけ満足するよう現図書館を増改築することを答申することとした。この際新築計画を採用しなかったのは、資金の不足もさることながら、一つには将来の学術情報サービス機関としての図書館のあり方、規模について正確な予測を行うことが現段階においては困難であるためであった。」とあり、「今後10年を経過した時点において、改めて本学図書館のあり方、ならびにその規模について再検討されることを要望するものである。」と結ばれている。

1980年5月、図書館東側に事務室と地下2階の書庫を増築し、延床面積8,430㎡、収容可能冊数87万冊、閲覧席数712席の図書館が再生された。工期は「1979（昭和54）6月26日から1980（昭和55）年5月31日」と『南山大学図書館増築工事』の小冊子に記載されている。この増築



図書館増築工事、図書館棟前の駐車場に地下書庫を拡充した（1979.10）
 （『南山大学五十年史 写真集』掲載、提供：南山アーカイブズ）



図書館棟前の駐車場を地上庭園に整備する工事 (1980.5)
 (『南山大学五十年史 写真集』掲載、提供：南山アーカイブズ)

変化はそれだけだろうか。実は、1979-1980年の増改築の前後から、現在まで続く主要な別置資料を開設しているのである。それが、「CJSコーナー」や「三宅文庫」であり、「キリスト教コーナー」である。「カトリック文庫」はもう少し歳月を下った1993年に開設となるが、1979-1980年増改築の床面積内での別置コレクション、という意味では同列に扱っても差し支えないであろう。そして、この4つの資料群は言わずと知れた本学の二枚看板「国際性(化)」と「キリスト教(カトリック)」に係る別置であり、前二者は「国際性(化)」に、後二者は「キリスト教(カトリック)」に関連する。

さて、別置とは何であろうか。『図書館用語集 4訂版』(日本図書館協会, 2013)では「図書館資料は主題により分類し、すべての資料を一元的に分類順に排架することが原則であるが、管理上、利用上のさまざまな観点から、一般の図書とは別にして配置・排架すること」と解されている。つまり、通常の書架とは異なる場所にまとめて配架することで利便性を高めることを目的にした、図書館としての政策的行為とその結果である。典型的な例としては、通読するのではなく主として調べものに利用する辞書・辞典などを「参考図書」とする別置などがある。これ以外にも各図書館で、設立目的や蔵書構成、利用者層などに照らして“特別”と位置づけられる資料群を別置する状況が散見される。謂わば別置は各図書館の思想や特色を写す鏡となる。他方、図書館では体系的な基準・分類法に基づき配架されるため、別置資料はその枠組みから外れることになる。逆に言えば、別置には、分類・配架体系を崩してもなお説得力ある理由が求められる。本学図書館の別置はどのように評価できるのだろうか。

■CJSコーナー：約6,000冊(2022年10月現在)

「CJS」は「Center for Japanese Studies」(日本研究センター)の略称である。本学創立25周年(このときの起点は1949)の記念事業として1974年に創設された「外国人留学生別科」について、当時のヒルシュマイヤー学長は当初、「日本研究センター」を構想していた。学校教育法に基づく設置認可の関係で現在の名称に落ち着き、近年学内では単に「別科」と呼ぶことが多いが、現在でも海外とのやりとりでは「Center for Japanese Studies」が用いられており、図書館でも「CJSコーナー」の呼称を使用している。端的にいえば、CJSコーナーは別科用の資料群である。

一般的に別科は、留学生が大学に進学するための予備教育機関とされるが、本学では学生交換協定を結んで短期留学プログラムを提供している。これを踏まえて、教育内容は次の3つの理念を柱として成り立っている。すなわち「①外国人の必要に合致した有効で豊富な日本語教育プログラムを提供すること、②日本文化や日本経済についての講義を英語で行い日本全体について正確な知識を獲得させること、③ホームステイを通して日本文化を実際に体験させること」である。この3理念に沿って授業が実施され、CJSコーナーもそれに見合う資料構成とする必要があるだろう。こうしたCJSコーナー開設の経緯や時期を丁寧に跡づけられるとよいのだが、残念ながら会議体(図書館委員会)の資料としてわずかに残るのみで、詳細は不明である。それでも、1973年に「日本研究センターの図書処理について」という報告がされており、中央図書館集中配架制度や資料重複所蔵などの本質的な議論を踏まえながら、現在と同様の図書館内での別置に落ち着いたように見受けられる。しかし、翌1974年には「CJS別置問題について」と題した記録があり、この時点では、別科側の建物への配架となったようである。その14年後の1988年には「CJS図書の運用方法」なる議題の記録があり、指定図書扱いでは留学生の利用に不便が生じているので一般図書扱いに変更したいという趣旨が審議され、了承されている。恐らく貸出期間が短いための不利益を解消したいということなのだと思える。これらのことからすると、1974年の別科

創設時には別科側に配架されていたが、その後のどこかで指定図書のひとつとして図書館側に配架する運用に変わり、さらに1988年には現在の図書館の別置としてのCJSコーナーに生まれ変わったことになる。つまり、現行は1973年当初に目指した配架・運用に帰着したことになり、図書館への配架が1979-80年の増改築がきっかけとなった可能性は捨てきれない(現在では、もともとのCJSコーナーの資料とは別に、別科の授業に即した別科の指定図書も設けている)。

また、予算の仕組みに工夫が見られる一方で大きな課題としても認識している。それは、この資料を選定するのはもちろん別科側なのだが、予算も別科側に付与されている点である(現在の資料選定および予算所管は外国語教育センター)。したがって、別科で必要とされる資料を、別科の予算の範囲内で選定し、それは図書館のCJSコーナーに配架されることになる。研究所・研究センターのように図書室を擁しない組織としてはやむを得ない措置なのかもしれない、結果として別科にとって望ましいかたちになっているのかもしれない。反面、図書館には図書館が目指す蔵書構築と資料選定基準があり、その埒外の資料選定が行われる可能性という課題が存在する。別科の授業では、従来からの日本の歴史や政治、経済、文学、宗教などに加えて、ポップカルチャーなどの内容も充実させているという。図書館側でも別科のそのような動向に注視しつつ、別科側でも図書館の方針や取組みを尊重するような、相互の理解・連携が今後ますます重要になることが予測される。

■三宅・ヒルシュマイヤー文庫：約4,800冊(2022年10月現在)

三宅文庫とは、故三宅重光元東海銀行会長(1911-1996)(南山大学名誉経済学博士)の叙勲を契機とし、日本の経済・経営に関する欧文文献購入を目的とした寄付金により1983年に設置されたコレクションである。以後も経常費にて継続して収集している。三宅重光は、1982年に当該地域を中心に財政支援を要請した本学の国際化プロジェクトに多大な貢献のあった人物であり、当プロジェクトの募金は外国人留学生別科関連設備へも充てられている。資料収集対象は、日本について書かれた「経済」「経営」に関する欧文文献を主とするが、「経済」「経営」の領域と重なりを持つ「政治、法律、社会」の隣接分野を副次的対象としている。

このコレクションは「三宅文庫」と冠されてはいるものの、ヒルシュマイヤー元学長旧蔵分が多数含まれていることが知られているため、ここでは「三宅・ヒルシュマイヤー文庫」として紹介する(後掲の参考文献・林雅代による論文を参照のこと)。三宅が企業家であり、ヒルシュマイヤー元学長が日本経済研究者であったこと、この二人に親交があったこと、そして何より文庫設置(1982年10月)の数ヶ月前(同年6月)にヒルシュマイヤー元学長が急逝していることは、当該文庫の蔵書構成と決して無関係ではなからう。また、ヒルシュマイヤー元学長が神父であったことや、教員として、あるいは学長として教育に深く携わったことからして、少ないながらも宗教や心理学・教育学の資料を含んでいることも肯ける。加えて、1980年代の日本の著しい経済発展が何に由来するのか、そのことに対する外国からの探求が、外国人をして日本や日本人、日本社会や日本文化に興味を向かわせ、これらの資料を相当数含むヒルシュマイヤー元学長旧蔵分を当該文庫に組み入れたと考えても不思議ではない。そしてこのことが今でもCJSコーナーとは良き補完関係であり続けていることにも注目しておきたい。

寄付や寄贈を端緒とするコレクションは、経常費で追加収集していくとしても、ややもすると単に予算消化するだけの対象となり、目的を見失って精彩を欠く、などという事例は他館でも時として見受けられる。そうはならないよう、折を見て設置趣旨に思いを馳せつつ大事に育てていくことが、当初の関係者の遺志を継ぐことになるものと考えている。

■キリスト教コーナー：約11,000冊(2022年10月現在)

カトリック大学である本学の学生のキリスト教理解を深め、キリスト教関連授業科目の学習に役立つ基本的な資料を提供する目的で、1982年に設置された資料群である。キリスト教入門書をはじめ、聖書およびその注釈書、聖人伝、典礼書・儀礼書・祈祷書・要理書およびその解説書のほか、カトリック作家・カトリック関係者・聖職者の著作あるいは関係資料を多数所蔵している。また、「キリスト教的ヒューマニズム」「キリスト教の歴史」「宗教的ヒューマニズム」「イエス・キリスト」「旧約聖書」「新約聖書」「宗教心」「諸宗教間の対話」等々をキーワードとした、宗教科目『キリスト教概論』『宗教論』の授業概要に沿った資料の優先的な受入を行っている。さらに、比較宗教についての資料や他で紹介するカトリック文庫講座に関連する資料にも収集範囲は及んでおり、「キリスト教世界観に基づく学校教育」を建学の理念とする、本学ならではの特色あるコーナーとなっている。

予算についても大別して次のものがあり、重点的に配分されている。①共通教育の授業科目のひとつである

宗教科目に係る資料購入予算、②キリスト教学科の学生用資料購入予算、③図書館事務室に選書権のあるキリスト教コーナー予算、の3つである。①は全学学生の利用に適した資料が対象となり、②はキリスト教学科の学生の利用にも堪えうる、より専門的な資料をも含み、③は図書館事務室の担当事務職員で資料選定基準に基づき選書する、という切り分けをしているが、すべてがキリスト教コーナーに集約されることになる。

選書方法にも工夫を施している。②をキリスト教学科の教員が選書するのは何の不思議もないが、①および③については、前者は教員、後者は図書館事務室担当事務職員が選書すべきところ、二者は協働選書を実施しているのである。本学の宗教教育を管掌する宗教教育委員会から選出されるキリスト教学科教員1名と事務職員の担当メンバー数名にて、書店からの見計らい(パンフレット等ではなく現物見本)をもとに選書している。このことにより、担当事務職員はキリスト教に関する知識を身につけて選書の目を養えるばかりでなく、教員側も図書館事務室に選書権が付与されたキリスト教コーナー予算での選書に関与できる相乗効果が見られる。

現時点では、資料選定基準、予算、選書体制の3要素が整備された状態であり、引き続きこの維持に努めたいと考えている。

■カトリック文庫：約7,800冊(2022年10月現在)

カトリック文庫は、「カトリック大学の図書館として相応しいキリスト教関係資料群を構築することにより、近代日本におけるキリスト教史を研究する国の内外の研究者に資すること」を目的として、1993年に開設されたコレクションである。主として明治・大正・昭和初期に成立した聖書、祈祷書、聖歌集、要理書およびそれらの解説書、聖人伝はもとより、布教資料、教会・修道会史資料などのキリスト教関係資料(刊行物以外を含む)を幅広く収集対象としている。また、「カトリック」文庫ではあるが、期待する目的を達成するために必要な「カトリック以外のキリスト教の教派のものをも含むもの」としている。

開設目的にある「研究者に資する」ための収集とは、額面通りの提供するための収集であると同時に、保存・保管の観点から資料の散逸を防いで後世に永く残したいという、カトリック大学としての使命とも言える強い思いがあったことは記しておきたい。というのも、資料収集を本格化させた1990年頃はちょうど日本各地の教会が改築の時期に入っており、古い時代の資料が廃棄されようとしていた状況を危惧していたからである。そのため、現在の受入資料は経常費にて毎年度購入するものが大半であるが、初期の蔵書は教会、修道会や、カトリック関係機関、信者等の関係者個人からの寄贈資料が圧倒的に多く、開設時の中核を成していた。実際、当時の担当事務職員の記録では、寄贈のために私的訪問を含めて約3年間で100か所以上、北は東北から南は九州までを巡り、協力機関は沖縄にまで及んでいる。こうした地道な活動なしではカトリック文庫が成り立ち得なかったといっても過言ではなからう。

また、本項の冒頭に記載した開設目的(「南山大学図書館『カトリック文庫』について」より。カトリック文庫運営上の助言機関としての会議体「カトリック文庫協議会」資料[1993年5月13日開催、資料3])には、「研究者に資する」とあるが、研究を生業にする“研究者”のみを想定している訳ではないことは、当該会議体の記録からも読み取れる。学生や在野の研究者等の学外一般の方々を含めて謂わば“研究する者”と捉えている。参考に現在の「資料収集方針」から抜粋しておくが、ここでは「キリスト教史研究に資する」とその点を明確にしている。

(基本方針)

カトリック大学の図書館に相応しいキリスト教関係資料群を構築し、近代日本におけるキリスト教史研究に資するという「カトリック文庫」の目的の達成のため、「カトリック文庫」の資料収集方針・基準を以下に定める。

- 1 明治・大正・昭和初期のキリスト教関連資料を収集する。
- 2 神学書は原則として収集しない。ただし日本のカトリック者による教義等の解説書はこの限りではない。
- 3 原則として、カトリック文庫内の重複本は認めない。ただし、資料の状態等によりこれを認める場合がある。

(収集する資料)

基本方針に基づき、次の資料を収集する。

- 1 聖書、祈祷書、聖歌集、要理書、解説書、聖人伝のうち、1868年(明治元年)から1965年(第2バチカン公会議閉会年)までに出版された、主にカトリック関連資料
- 2 1965年以降の刊行物のうち、近代日本のキリスト教史研究に欠かせない資料
- 3 アジア管区(日本を含む教会管区)への布教に関する海外のカトリック関連資料(出版年を問わない)

4 教会、修道会が出版した史誌、布教誌、教区報、教会報等(出版年を問わない)

5 先に掲げるもの以外で、カトリック文庫の基本方針に沿う資料

この中でも和訳聖書の収集には以前から注力されていた。プロテスタント系の諸大学には質量ともに敵わないが、各教派のものをまとめて所蔵しているカトリック系大学は決して多くないだろう。資料収集における後発組としては偶然であったかもしれず、あるいはプロテスタントの方が先んじて和訳事業を展開した側面が影響したかもしれない。しかし、聖書には何かを訴える力があり、人を惹きつける魅力がある、というのは先達の共通認識であったようである。聖書展がカトリック文庫開設以前から本学で何度も開催されているのはその証左であろう。

その他、国内の類似コレクションと比較すれば、「(収集する資料)4. 教会、修道会が出版した史誌、布教誌、教区報、教会報等(出版年を問わない)」にも力点を置いている点は恐らく当該文庫に特徴的だと思われる。近代日本のキリスト教史研究のためには、個々の教会や修道会の資料が必要不可欠であるが、関係者のみに配付されることが多く、通常は書店の販売経路に乗ることがない。そのうえ、小冊子や比較的安価または無償提供の場合も多く、安価な引き取りになることを嫌って古書店に持ち込まれる機会が少ないためか、市場に出回りにくく、入手が困難な事情がある。それゆえ散逸しやすい。これらを精力的に収集することは、当該研究に資するのみならず、コレクションとして、ひいては大学としての評価向上につながるものと考えている。

そして、キリスト教コーナーとカトリック文庫とは、片や学習・教育用、片や研究用として、同分野の資料収集を補い合っている。

ここからは、カトリック文庫の中でもとりわけ特色ある資料群を紹介する。

●平戸御水帳

唯一無二の一点もの史料である。「御水帳」とは、いわば洗礼台帳であり、キリシタンの潜伏時代以来の洗礼を御水と言ったことに由来する。本史料は、平戸島における、1878(明治11)年7月28日から1884(明治17)年9月7日までのほぼ6年間、約70名の授洗記録となる。

本史料には比較的現存数が多い宗門人別改帳では到達し得ない情報が記載されており、それだけでも重要度が高いと言える。一般的に五島・外海(そとめ)・長崎系と生月(いきつき)・平戸系の2系統に分類されるキリシタンのうち、数少ない生月・平戸系の史料が発見されたことは意義深い。殊に生月・平戸系とひとくりにされがちであるが、大きく異なる要素があるため、その意味でも、本学の『平戸御水帳』は貴重である。

『平戸御水帳』は、記載人数は少ないものの、受洗者本人のみならず「帳方」「水方」「抱親」などの名前を丹念に見て比較すれば、復活時代のカトリック教会の勢力を把握する一助となるだけでなく、人物の確認、さらには受洗年齢や家族関係から婚姻関係や信徒の移動まで、多岐にわたる当時の状況を詳細に知ることができる。他の御水帳と突合わせて調査することで、より詳しい実態が掴めることは言うまでもない。また、明治初期の庶民生活に関する基礎史料としてだけでなく、カトリック教史、民俗学あるいは宗教社会学等々、幅広い研究分野で有益な史料となるのではと期待を寄せている。

●高田三郎コレクション

名古屋市出身で、本学ともゆかりのあるカトリック作曲家、高田三郎の関連コレクションである。大半は、没後の2003年に遺族より寄贈された資料により構成されている。

特に貴重なのは高田による手稿楽譜であり、とりわけ日本における典礼聖歌史上、画期的と評される「やまとのささげうた」は注目される。第二バチカン公会議(1962-1965)の『典礼憲章』により、それまで原則としてラテン語で行われてきた教会での祈りを、各国の信者が母語で行うことが可能となった。日本でも日本語による日本人のための式文と式文をうたう音楽=典礼聖歌が求められ、作曲されることとなった。しかも同曲は、西洋音楽式の旋律ではなく日本の伝統音楽の旋律を用いた最初ではないかと考えられている。

この他にも、高田自身が指揮する演奏会や合唱指導する講習会などを収録した映像や音源の資料も所蔵している。さらに、高田関連の各種資料を備えており、高田の足跡を詳細に追える総合的なコレクションとなっている。

●音響映像グループメディアセンター資料

音響映像グループメディアセンターは、1974年から2000年まで本学隣接地に存在した、キリスト教教育に係る視聴覚資料の制作・発行機関である。ヒルシュマイヤー元学長を中心に、本学の設立母体である神言修道

会の複数の神父により提唱され、発足した。名称は、少人数によるグループ学習のためのメディア(当初はテープとスライド)の研究・制作を目的としたことに由来する。メディアにより受講者を刺激し、引き出された疑問や課題について小グループでの話し合いにより解決を図る、という欧米ではごく普通の方法が、キリスト教への理解を深めるうえで有効だと判断されたのであった。

良質な多数の作品が産み出されており、“視聴覚メディアによる宣教”に親近感のあった外国人神父たちが、教会や学校の諸活動における教材としてそれらを積極的に活用したことで、機関の存在と活動内容は次第に広まった。発足からの10年で、聖書研究をはじめ、黙想、人生、文学、美術、世界の文化、教会生活などの内容で、193種もの作品が制作されている。1984年からはビデオ制作を始め、2000年までに制作された作品は254種にも上る。

こうした視聴覚資料によるキリスト教教育に大きな役割を果たした同センターの作品を多数所蔵し、キリスト教史・布教史の研究に利用されている。

前述のカトリック文庫の開設目的の前段で、「図書館主導の立場を堅持しつつ」との記述があるが、これはいったい何を意味するのだろうか。大方の別置資料群は必要に迫られた結果としての成立が想像される。各方面からの要請に対して、誠実に検討し対応した結論としての合理的判断に基づく別置は、何ら咎め立てられることではない。一方、カトリック文庫は、むしろ図書館側から能動的・主体的に企画・立案し、関係各所に働きかけたことで実現した賜物だったのではなからうか。しかも、図書館の利益のみを追求する身勝手な考えではなく、建学の理念やキリスト教の思想に裏打ちされた、カトリック教会や学术界への貢献を考慮しての取り組みであったからこそその表現ではなかったか。この高い志を胸に留め、コレクションのますますの充実と創造的な関係諸活動に向けて、皆で知恵を絞っていききたい。



「カトリック文庫資料収集協力機関」パネル

6. 南山大学<瀬戸キャンパス>瀬戸図書館：地上1階・地下1階(2000-2017.2)

■延床面積：3,167㎡ 収容可能冊数：20万冊（運用可能冊数：16万冊）閲覧席：309席

南山大学は、2000年4月、瀬戸キャンパスに新たに総合政策学部、数理情報学部を設置する。新キャンパスの図書館設置にあたり、「南山大学図書館規程」を改正し、名古屋キャンパス、瀬戸キャンパスの図書館の名称をそれぞれ名古屋図書館、瀬戸図書館とすることとなった。1998年9月の新学部設置申請のために、事前計画・申請書類作成において図書館に関連する建築計画・図書整備計画等を検討する必要があり、1997年に以下の六つの柱とした基本構想の策定を行ったことが『南山大学図書館紀要第7号』に記載されている。

- (1)瀬戸キャンパスにおける教育・研究のシンボルとしての機能を有すること
- (2)総合的なメディア(情報)センターとしての機能を有し、最新のメディアおよび情報機器に対応可能な施設とすること
- (3)名古屋図書館とできる限り同一・同質のサービスを提供し、両キャンパス図書館の情報資源を共有して利用できること
- (4)館内の静粛性に配慮した建築・運用を行うこと
- (5)少人数のスタッフで運営できること
- (6)バリアフリーの施設であること



(提供：南山アーカイブズ)

これらの具現化に向けて、瀬戸図書館は延床面積3167㎡の前提条件のなかで、閲覧室、書架、マルチメディアルーム、多目的ルーム、パソコンルーム、コピールーム、ブラウジングコーナー、新聞コーナー、事務室、カウンターを配置して建築され、2000年3月1日に竣工を迎えた。

その後、17年を経て、2017年4月のキャンパス統合に伴い、瀬戸図書館の資料は、名古屋図書館所蔵資料と重複している資料を除き、新たに契約した学外書庫および名古屋図書館へ移管され、2017年2月に瀬戸図書館でのサービスを終了した。

7. 南山大学<山里町>：地上3階・地下2階(2017.3-2021.2)

■延床面積：8,441㎡ 収容可能冊数：100万冊 閲覧席：813席

瀬戸図書館を閉じた後、再び使い慣れた名古屋図書館で資料を提供することになったが、1979-1980年以降は大規模な改修は実施されていない。そこで少し視点を変えて、現在のこの建物で、あるいは図書館が主体となってどのような活動を行ってきたのか、図書館の建築・コレクションにまつわる歴史に引き続いて、本章では“南山大学図書館におけるキリスト教関連イベント”について、主だったものを時系列で振り返っていきたい。

●1980年代：「南山大学聖書展」の開催(1983.10)

1983年10月4日、「南山大学国際化プロジェクト」の一端として、校舎増築(詳細は前章「5. 南山大学<山里町>：地上3階・地下2階(1980-2017)」に譲る)落成記念に「南山大学聖書展」が開催された。当時の雄松堂書店の協力を得て、図書館にて内外の聖書・聖書関連資料計17冊の展示を行った記録が『南山大学聖書展目録』に残っている。以下に、目録から当時の展示資料を引用する。

<展示目録>

No.	資料名	年代
1	アントン・コーベルガー印行 アントニヌス「倫理神学大全」全4冊 (Summa Theologica Moralis, I, II, III, IV)	1477-1479
2	ゲーテンベルグ印行「四十二行聖書」(復刻版)	1450-1455
3	シェッファーおよびフスト印行「マインツ聖詩篇」(復刻版)	1457
4	ジュネーブ聖書(復刻版)	1560
5	欽定英訳聖書(ブルース・ロジース ワールドバイブル)	1949
6	The Holy Bible. (Macklin's Sumptous Edition)	1800-1816
7	ダブス・プレス印行(聖書)	1903-1905
8	ラテン語版 新約聖書	1531
9	イタリア語訳「新約聖書」	1655
10	カトリック布教地図帳 全7巻	1702-1710
11	聖書に見られる絵画(MS.Add 47680)(復刻版)	1954
12	こんてむつすむん地(復刻版)	1596
13	ぎやどぺかどる 上巻(復刻版)	1599
14	おらしよの翻訳(復刻版)	1600
15	ギユツラフ訳「約翰福音之伝」新喜坡刊(復刻版)	1837
16	ベッテルハイム「路加伝福音書」香港刊(復刻版)	1855
17	ヴァリニャーノ「日本のカテキズモ」(復刻版)	1586

本展では、聖書の翻訳と印刷技術の発明という点に着目しながら、さまざまな訳の聖書をセレクトしていたようだ。貴重なインキュナビュラであるアントン・コーベルガー印行 アントニヌス『倫理神学大全』(No.1)に始まり、世界最初の活版印刷物ゲーテンベルグ印行『四十二行聖書』(No.2)、四ツ折本という小型で扱いやすいサイズから一般家庭で用いられるきっかけとなった『ジュネーブ聖書』(No.4)など、印刷や流通の流れに着目しつつ、併せ

て、布教の歴史を繙くヒントとなる『カトリック布教地図帳』(No.7)、宗教絵画の原点をなす貴重資料『聖書に見られる絵画(MS.ADD 47680)』(No.11)、日本での布教の痕跡を示す『こんてむつすむん地』、『ぎやどべかどる』、『おらしよの翻訳』(No.12-14)など、聖書にとどまらず、周辺資料も幅広く選ばれていることが窺える。図書館の所蔵が叶わない貴重資料の展示は書店の協力なくしては行えず、普段見る機のない資料の数々は来場者の目を楽しませたに違いない。残念ながら「南山大学聖書展目録」以外に展示の様子を記録した資料は発見されなかったが、校舎増築竣工記念にふさわしい、華やかな選書の痕跡を読み取ることができる。

●1990年代：和訳聖書展～南山大学図書館カトリック文庫所蔵資料より～(1996.10-11)

1996年の10月28日～11月8日には、カトリック文庫の所蔵資料から和訳聖書に焦点を当てて展示資料を選定した「和訳聖書展」が開催された。明治期からの和訳聖書『新約聖書約翰傳(ヘボン訳)』、『志んやく[せい]志よ だい五のまき(ブラウン訳)』、『新約聖書哥林多前書(翻訳委員社中訳)』、『舊約聖書出埃及記(東京聖書翻訳委員会訳)』等をはじめとする計30点の和訳聖書に加え、『聖經理證 横濱版』、『倫敦聖書教會傳道關係本 精寫本』など聖書以外の貴重な収集資料、さらには神言修道会 多治見修道院に協力を仰ぎ、同院収蔵の「ミサ祭服(ストラ)」、「聖杯(カリス)」も併せて展示された。当時の記録によると入場者数は395名を数え、盛況だったようである。1993年に設置されたばかりの「カトリック文庫」の存在感を示す、初めての大きな機会だったともいえる。

●2000年代：秋の企画展Music from Christianity～教会音楽の2000年～(2000.10-11)

2000年の10月30日～11月11日には、“Music from Christianity”と題したテーマで教会音楽について触れる展示が行われた。この展示に合わせて、本学人文学部キリスト教学科のウォルター・ダンフィー(DUNPHY, Walter)教授による特別講演「バッハの音楽と宗教」も開催され、賑わいを見せたようだ。同年に発行された『南山大学図書館紀要第7号』においては、本学経済学部川崎勝教授によるエッセイ「図書館と私」内で本展の感想が綴られている。川崎教授は文中で、展示における「パンフレット」作成・保管の重要性を「文化の蓄積」として指摘しながら、南山大学の史料を収集・公開する「南山アーカイブズ」の実現の必要性を説いている。「南山アーカイブズ」は2014年、南山学園の史料室と南山大学の史料室が統合され、史資料保存利用施設として、五軒家町内の「南山学園ライネルス館」に開設を実現することとなる。

●高田三郎「ひたすらないのち 愛知演奏会」(2005.9)

カトリック作曲家高田三郎の帰天5周年にあたる2005年には、9月18日、愛知県芸術劇場において「ひたすらないのち 愛知演奏会」が、南山学園の主催で開催された。当時世間を賑わせていた愛・地球博との関連イベント(愛・地球博パートナーシップ事業)であった本演奏会では、大久保混声合唱団、豊中混声合唱団、東海メールクワイアーなどの名だたる合唱団とともに、南山大学合唱団、南山大学管弦楽団が出演し、「水のいのち」「典礼聖歌」等の、高田の代表的な合唱曲を披露した。図書館はこの演奏会に合わせて、高田の肖像写真を用いた展示パネル、手稿譜、高田三郎周辺資料の演奏会会場展示を行った。現在もカトリック文庫では高田三郎コレクションをアーカイブし、デジタルライブラリーでも公開している。「ひたすらないのち 愛知演奏会」関連の情報については、カトリック文庫所蔵の以下の資料を参照されたい。

<南山大学図書館カトリック文庫所蔵「ひたすらないのち」関連資料>

No.	資料名	資料ID	請求記号
1	ひたすらないのち愛知演奏会記念文集： 高田三郎作品による	1014950	CAT3 196.5 1 v.0-64
2	高田三郎作品によるひたすらないのち愛知演奏会※	1220537	CAT3 196.5 1 v.0-122
3	高田三郎関係資料 「ひたすらないのち 愛知演奏会」パンフレット	V044442	CAT3 196.5 1-7 v.0-3

※当日の録音資料(CD)

<「ひたすらないのち 愛知演奏会」基本情報>

日時：2005年9月18日(日)

場所：愛知県芸術劇場コンサートホール

主催：学校法人南山学園 高田三郎作品による「ひたすらないのち愛知演奏会」実行委員会

共催：南山大学宗教教育委員会・東海メールクワイア

後援：愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会・日本男声合唱協会(JAMCA)

本演奏会終了後、名古屋・瀬戸の両キャンパス図書館において、各学園祭の開催時期にあわせて高田三郎コレクションの展示が行われた。高田留奈子夫人はじめ、多くの関係者の方々のご厚意・ご協力のもと寄贈された貴重な高田三郎コレクションが多くの目に触れる機となったことは、カトリック文庫にとっても大きな喜びであった。

●2010年代～現在：カトリック文庫講座の開催(2015.11-現在)

時は現在に近づきつつある2010年代、南山大学図書館カトリック文庫に転機が訪れる。記念すべき第1回「カトリック文庫講座」の開催である。キリスト教史上重要な位置づけにある、大浦天主堂の「信徒発見」から150年目にあたる2015年、「信徒発見150年」をテーマにした第1回の講座開催以来、毎年キリスト教にかかわるテーマでさまざまな講師を招聘し、それぞれに実りのあるご講演をいただいている。以下にその歴史を振り返りたい。

<カトリック文庫講座のあゆみ>

回次	開催年	資料名	講師※
1	2015	記念petit講座「信徒発見150年」	発題者：三好 千春教授 西脇 純教授 コメンテータ：アンジェリーナ・ヴォルペ教授 ロジェ・ヴァンジラ・ムンシ准教授 司会者：森山 幹弘教授
2	2016	かくれキリシタンの祈り、オラショ	講 師：村上 茂則氏(かくれキリシタン) ロジェ・ヴァンジラ・ムンシ准教授 進行役：森山 幹弘教授 西脇 純教授
3	2017	「母なるもの」のまなざし -遠藤周作の作品を味わうための講座-	金 承哲教授
4	2018	潜伏キリシタンからカトリック教徒への復活 -「御水帳」にみられる日本人信徒指導者の役割とその変容-	平田 賢明氏(長崎県北松浦郡小値賀町 教育委員会・歴史民俗資料館学芸員)
5	2019	ローマの地下世界に魅せられた研究者たち ：死者に捧げられた地下都市カトコンベと初期キリスト教	山田 順氏(西南学院大学・准教授)
-	2020	コロナ禍のため開催見送り	-
6	2021	浦上のキリシタン、高木仙右衛門のこと -明治政府は、なぜキリシタン禁制高札を撤去したか-	高木 慶子氏(カトリック援助修道会会員・ 上智大学グリーンフケア研究所名誉所長)

※所属・役職等は講座開催当時のもの



2015年度第1回記念 petit 講座「信徒発見150年」の風景
(左) 本学教員による講座の様子 / (右) 講座に関連した図書館展示資料とレジュメ

カトリック文庫講座は2015年度初回の講座を発端に、外部講師の招聘・本学博物館との連携・南山アーカイブズ所蔵品の展示等、回数とともに試行錯誤を重ねながら、より多様な側面からキリスト教に触れられる講座を目指してきた。図書館が「である」「つながる」「かわる」をスローガンに「ライネルス中央図書館」として生まれ変わる2023年、図書館はより一層学生、教職員、地域住民、他大学や他機関と「であい、つながり、かわって」いく機会に恵まれるだろう。その一端を「カトリック文庫講座」はじめ、図書館に係るさまざまなイベントが担っていくことができれば幸いである。

8. ライネルス中央図書館構想に基づく図書館改修工事(2021.3-)

2021年5月、南山大学創立75周年事業の一環として、ライネルス中央図書館構想ワーキンググループが発足した。学内では、2017年度より建築家アントニン・レーモンドの設計思想である「自然を基本として」の継承を基本方針としたレーモンド・リノベーション・プロジェクトが進められており、既存教室等の改修、学生の居場所となるセミナー室等の整備、意匠性を維持するための外装改修、キャンパス内のユニバーサル化が実現された。学内が次々に整備されていく中で、図書館は手つかずのまま残された最後の建物になっていた。

ライネルス中央図書館構想ワーキンググループの発足にあたり、当時の図書館長、総合政策学部山田望教授より「私の考えるライネルス中央図書館像」として「『である』、『つながる』、『かわる』- 知の塩、世の光として真のイノベーションを実現するために-」の文章がワーキンググループのメンバーに示された。

その中の「1. 学園創立者ヨゼフ・ライネルス師の功績」には、青山玄師著『ライネルス師とその人柄』より抜粋された内容が以下のとおり紹介され、図書館改修のコンセプトの礎が示されたのである。

ライネルス師が、学園創立期の校友会誌『南山』の表紙や卒業記念アルバムなどに署名を求められる度に綺麗な筆跡で記していた、“*Seid edel, treu und gut*” (高潔忠実にして善良なるべし)のドイツ語文は、文豪ゲーテの“*Das Göttliche*” (神的なるもの)という詩の最初の6行からヒントを得たもので、“*Edel sei der Mensch, Hilfreich und gut! Denn das allein Unterscheidet ihn. Von allen Wesen, Die wir kennen.*” 「人間よ、高貴なれ、人に尽くし、まことあれ! かくありてこそ人は、我らの識るいっさいの生きものより別たるるなれ」によるものである。ライネルス師が機会あるごとに記した、“*Seid edel, treu und gut*” (高潔忠実にして善良なるべし)の標語は、後にボルト神父の提案により、“*Hominis Dignitati*” (人間の尊厳のために)という建学のモットーとして生き続けることとなったのである。



(提供：株式会社大林組)

図書館の改修工事は、外周に足場を組み、資料を順に移動させサービスを継続しながら実施している。

2022年度の第1クォーター授業期間中は主として地下1階と外壁・屋上を、6月には1階事務室を地下1階に移設し、第2クォーターは2階と屋上を、そして学生の夏期休暇期間に入退館ゲートを地下1階に移設し、第3クォーターの9月現在は1階の改修工事が行われている。

9. おわりに：ライネルス中央図書館として(2023.4)

ライネルス中央図書館は2023年4月にリニューアルオープンを迎える。新しい図書館には、人・資料や情報・異なるグループが相互に「である」「つながる」「かわる」ことができる様々な空間が用意されている。その新しい空間でのサービスや活動を通じて、南山学園の建学の理念への理解、グループの活発な交流、多様な学問分野への探究、教育・研究のための資料の充実、教育・研究成果の積極的な公表が推進されなければならない。

2023年はカトリック文庫設立30周年の節目の年でもある。新たに図書館Webページにカトリック文庫のポータルを開設し、カトリック文庫の約7,800冊に及ぶ資料、カトリック文庫講座の開催、カトリック文庫通信『カトリコス』の発行などを通じて、新しい図書館から様々な情報を発信し、カトリック文庫が「である」「つながる」「かわる」の一翼を担うことを約束して、「NANZAN ビブリオテカ ヒストリア」の筆を擱くこととしたい。

<歴代図書館長(敬称略)>

歴代	館長名	在任期間
	パウルス・チャブリッキ(CZAPLICKI, Paulus, SVD)	(外専時代)
初代	大沢 章	1949.6-1950.10
図書館長事務取扱	エヴァ・M・ペリー(PERRY, Eva M.)	1951.9-1953.5
第2代	テオドール・ファンザイル(VAN ZIJL, Theodor, SVD)	1952.4-1963.7
図書館長事務取扱	ペーター・フェンネ(VENNE, Peter, SVD)	1953.4-1958.5
図書館長事務取扱	卜部 小十郎	1962.7-1963.11
図書館長事務取扱	宮内 璋	1964.11-1966.3
第3代	木村 太郎	1966.4-1970.3
第4代	大庭 征露	1970.4-1971.3
第5代	塩野谷 九十九	1971.4-1972.3
第6代	村松 恒一郎	1972.4-1974.3
第7代	山田 隆治	1974.4-1976.3
第8代	石黒 毅	1976.4-1981.6
第9代	宮川 茂夫	1981.6-1988.3
第10代	山本 和義	1988.4-1994.3
第11代	美濃部 重克	1994.4-1998.3
第12代	浜名 優美	1998.4-2002.3
第13代	大森 正樹	2002.4-2006.3
第14代	水谷 重秋	2006.4-2010.3
第15代	細谷 博	2010.4-2012.3
第16代	森山 幹弘	2012.4-2018.3
第17代	山田 望	2018.4-2022.3
第18代	太田 達也	2022.4-現在

【参考・引用文献】

- ・『南山大学五十年史』(南山大学, 2001)
- ・『南山大学五十年史: 写真集』(南山大学, 1999)
- ・『Hominis Dignitati 1932-2007: 南山学園創立75周年記念誌』(南山学園, 2007)
- ・『南山大学七十五年史』(南山大学, 2022)
- ・「南山大学瀬戸キャンパスにおける図書館開設報告」土屋玲 (南山大学図書館紀要) 7, p.7-24, 2001.5
- ・「ヒルシュマイヤーの教育論の背景: ヒルシュマイヤー文庫について」林雅代 (アルケイア: 記録・情報・歴史) 10, p.39-55, 2016.3

(石田 昌久、加藤 富美、伊藤 敦子、加藤 可純)

南山大学図書館「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、聖書、祈祷書、聖歌集、要理書およびそれらの解説書、布教資料、聖人伝などを、多くの皆さまからご寄贈いただきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。また、従来からの資料に加えまして、お手元に教会・修道会史資料(教会・修道会刊行物)などがございましたら、引き続きご寄贈を賜りますよう、よろしくご願ひ申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス No.37 2022.11.1発行

編集・発行: 南山大学図書館 カトリック文庫グループ

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone: 052(832)3163 / Fax: 052(832)3462

* 図書館Webページでもご覧いただけます。

<https://office.nanzan-u.ac.jp/library/>